

小学校音楽科における言語活動の充実に関する一考察

—イタリアの小学校教科書 *musica guida* (2008) のワークシートに着目して—

大野内 愛

(広島文教女子大学)

Enhancing Language Activities in Elementary Music Education: Based on Worksheets from the Italian Elementary School Textbook *Musica Guida* (2008)

Ai ONOUCHI

Abstract

This study aimed to examine methods of cognitive learning employed in music classrooms in Italy based on an analysis of the Italian elementary school textbook *Musica Guida* (2008). Using worksheets from that textbook, this study also includes a discussion on how learned content can be linked to language activities. This study involved the development of a series of proposals on how language activities can be enhanced in Japanese music classrooms. The results indicated that when devising teaching methods for cognitive learning, it is necessary to provide students with textual explanations in addition to images. It was also found that to encourage students to perceive the characteristics of music and virtues of musical performance and express them in words, teachers must help students understand the close relationship between music and their daily lives; teachers need to demonstrate the effect of music on the students' lives and emotions. Once students have grasped these important points, they are more likely to take an interest in activities that require them to consider the characteristics of music and virtues of musical performance and to apply that knowledge in presentation activities.

I 研究の動機と目的

平成 22 年に国立教育政策研究所が行った「特定の課題に関する調査 (音楽)」によると、児童に対する質問紙調査において「授業で音楽を聴くとき、その音楽のよさや美しさを感じ取ることは好きですか」という質問については 78.3%の児童が肯定的な回答をしているのに対し、「授業で音楽を聴くとき、その音楽の特徴や演奏のよさを言葉などで表そうとしていますか」に肯定的な回答をしたのは 55.1%、「授業で音楽を聴くとき、その音楽の特徴や演奏のよさを言葉などで表すことは好きですか」に肯定的な回答をしたのは 48.5%であった。つまり、児童は音楽のよさや美しさを感じ取ることは好きであるが、それを言葉で表すことは好きではない傾向があることが明らかとなった。また、本調査での学力調査の結果からも、児童が音楽に関する言葉を適切に用いて感じ取ったことや考えたことなどを表すことができるような力の育成に課題があることが指摘されており、言語活動を適切に取り入れる指導を工夫することの必要性が示されている。

こうした問題の背景には、認知的な学習が不足していることが 1つの要因として挙げられる。実際、筆者は中学校で授業をした際に、リズムや速度、メロディ、音色などの言葉の意味を正しく理解できておらず、自分が感じたことをうまく文章で表現することができていない生徒に出会った。音楽の特徴や演奏のよさを言葉などで表すためには、そのためのスキル、つまり認知的な学習が必要である。

筆者はこれまで、イタリアの音楽科教科書について研究してきたが、イタリアの音楽科教科書の特徴の1つとして、音楽的活動を伴わない「音楽理論の学習」という学習活動が存在することが明らかとなっている(大野内2012)。また情緒的内容よりも認知的内容の濃いものとなっていることも明らかとなった¹⁾。イタリアの音楽科教科書は、文章による説明が多く、音楽の専門用語の概念を言葉や文章で教授する傾向にある。

したがって本稿は、イタリアの小学校教科書の1つである *musica guida* (2008) を分析することにより、イタリアで行われている、音楽における認知的な学習の方法を探る。また学んだ内容をいかにして言語活動へつなげていくことができるか、ということの本教科書のワークシートから考察する。こうしたことにより、我が国の音楽科における言語活動の充実に対する示唆を得たい。

II 日本での小学校音楽科における言語活動

平成20年改訂の小学校学習指導要領では、改訂のポイントの1つとして「言語活動の充実」を挙げている。これは受動的になりがちであった鑑賞の活動を、児童の能動的で創造的な鑑賞の活動になるようにと意図して改訂されたものである。

各学年の目標及び内容の「B 鑑賞 (1) ウ」に記された内容を以下(表1)に示す。

表1 平成20年改訂小学校学習指導要領 音楽 各学年の目標及び内容「B 鑑賞 (1) ウ」の内容

1・2年	楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気づくこと。
3・4年	楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさに気づくこと。
5・6年	楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること。

ここでは、楽曲の特徴や演奏のよさに気付いたり理解したりする能力を育成するために、楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどの活動を行うことが記されている。5・6年においては、こうした活動のためには、楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことの原因を、音楽の中から見つけて自分の意見や感想をもつようにすることが必要とされている。具体的には、聴き取ったことや感じ取ったことを、音楽を形づくっている要素にかかわること、曲想にかかわることなどに分けて整理する活動、自分の好きな楽曲のよさを紹介文にする活動などが考えられている。

学習指導要領では共通事項の内容について、鑑賞の活動を通して、学んだ音楽を特徴づけている要素及び音楽の仕組み、音符、休符、記号や音楽にかかわる用語を鑑賞の活動に生かすよう示されている(図1)。

<p>ア 音楽を形づくっている要素のうち次の(ア)及び(イ)を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取れること。 (ア) 音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和音の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴づけている要素 (イ) 反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係などの音楽の仕組み イ 身近な音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。</p>
--

図1 平成20年改訂小学校学習指導要領 音楽 共通事項(5・6年生)の内容

つまり、効果的な言語活動とは、楽曲の特徴や演奏のよさに気付いたり理解したりするための1つの手段であり、そのためには共通事項にあるような音楽の特徴や音楽を形づくっている要素などに気づくことのできるスキルが必要なのである。

III イタリアの小学校音楽科教科書 *musica guida* (2008) の概要

1 教科書 *musica guida* の選定について

イタリアでは教科書について、値段の規定はあるものの、内容についての検定はなく、各出版社が各々に独自の教科書を出版しており、教科書の選定についても各学校に委ねられている。実際に約80社の出版社が教科書を出版しており、しかも、1社が複数の種類の教科書を出版していることもあり、イタリアで出版されている教科書の数は非常に多い。

その中で、大手出版社である Nicola Milano Editore 社が出版している教科書 *musica guida* を選定した。本教科書は、多く存在するイタリアの教科書の中でも、特にワークシートを多く用いていることが特徴であり、児童に作業をさせたり書かせたりする活動を多く含んでいる。したがって、音楽の認知的側面の指導

方法のみならず、本稿の研究目的である言語活動の充実にも示唆を与えてくれると考え、選定した。

2 教科書 *musica guida* の内容構成

本教科書は、全 380 ページから成り、1 冊に小学校 5 年間²⁾ 分の内容が盛り込まれている。その中で 1 年生は 86 ページ、2 年生は 74 ページ、3 年生は 67 ページ、4 年生は 64 ページ、5 年生は 54 ページのページ数を用いて内容が掲載されている。

各学年の学習内容の単元は以下のとおりである（表 2）。

表 2 教科書 *musica guida* の単元構成

1 年	単元 1	楽音と騒音：日常の音の認識、比較、関係	3 年	単元 1	さまざまな時代や社会文化、享受の背景、利用に関連した音楽におけるさまざまな表現形式の知覚
	単元 2	楽音と騒音の発生と反響、それらの特徴の理解		単元 2	さまざまな音楽の世界に関連した主要な楽器群とその特徴とその利用の理解
	単元 3	楽音と音楽の伝達力と表現力の役割と可能性の認識・理解・実験		単元 3	音楽言語における表現と伝達を利用したものを含む音楽の基準の理解と認識
	単元 4	音楽と歌に関する分析解釈の技術と戦略の認識・理解・実験		単元 4	音楽の生産物の生産と普及の調整のメカニズムの理解
	単元 5	音楽言語の概念の理解と音楽的文法の予備的記載の認識	4 年	単元 1	民衆の音楽の財産の存在の理解といくつかの種類の歌の認識
	単元 6	音楽の世界、歴史的出来事、社会文化の仕組み、周りの国の間の親密な関係の理解		単元 2	音楽経験の中での場所の多重性とさまざまな音楽の様相の理解 音楽の主要な役割
2 年	単元 1	音楽を鑑賞するという具体的な経験をとおした音楽の記述力・伝達力・表現力の可能性の理解と演奏	4 年	単元 3	さまざまな種類の音楽の存在を意識することと主要な形式的構造を理解すること
	単元 2	記譜の構造と役割の理解：休符と音の長さ		単元 4	音符や休符の長さや主要な速度指示に関係する概念の強化 他の長さのものも含めた 8 分音符の長さや休符の理解と認識
	単元 3	リズムの概念と小節の役割	5 年	単元 1	広告において音楽が影響を与える可能性の認識と理解 演奏活動をとおした影響の実験
	単元 4	五線の中で 7 つの音の位置と音の高さとの関係の理解		単元 2	リズムと速度指示の概念の理解 音楽的定規 2 拍子と 3 拍子の特徴と違いの理解
	単元 5	楽譜の要素と構造と役割の理解：簡単な合唱の経験をとおした手順の体験		単元 3	20 世紀初頭の芸術的音楽の理解：ジャズと映画の誕生
	単元 6	心理的要素や感情が影響する時間と場所における音楽の存在の理解		単元 4	音楽の消費の変化と過程の理解：社会文化との因果関係の理解

IV イタリアの小学校音楽科教科書 *musica guida* (2008) のワークシートの分析

本教科書では、単元ごとにワークシートが掲載されている。ワークシートは「作業シート」と「確認シート」の 2 種類であり、各単元に 2～6 枚の「作業シート」と 1 枚の「確認シート」がある。「作業シート」とは学習内容を理解したり深めたりするためのワークシートであり、「確認シート」は単元のまとめをするワークシートとなっている。

ここでは、日本の学習指導要領に照らし、充実した言語活動に必要なと考えられる、①共通事項についての内容と指導法と、②鑑賞における指導法をまとめる。

1 共通事項についての内容と指導法

ここでは、ワークシートでの学習内容や関連する内容について概観し、我が国の学習指導要領の共通事項に当てはまる部分についての指導法をまとめる。

(1) 音楽を形づくっている要素の学習

音色についての学習では、まず 1 年生の初めに生活音を自然な音と人工的な音に分類させている。牛の鳴き声やパトカーのサイレンの音など、教科書が提示しているいくつかの音について、児童が分類を行う。また次の段階として、そうした生活音の音の高さ、音の長さ、音の強さについても分類を行う。たとえば、赤ちゃんの泣き声と車のエンジン音を比べ、音の高さが高い音はどちらか、低い音はどちらかというよう

に尋ねるなどして、音高、長短、強弱の意味を教えている。自分で音の特徴を言うのではなく、選択肢が準備され、その中で当てはまるものに○をつけるという形式である。また「歩く音」と「サイレンの音」について、それぞれを特徴づける形容詞を書くという作業も含まれている。音楽を聴いてイメージを書くというワークシートでも、1年生では自由に書くよりも「喜び」や「静寂」など、選択肢があることが多い。

速度や強弱の学習では、○×問題を提示し、文章で書かれたものについて、児童が考え、○か×かを付けるという形式が多くみられる。たとえば「この曲はゆったりした曲である」という文章に対し、○か×を付けるというものである。曲の音色や強弱、リズム、旋律、速度については、1・2年ではほぼ常に選択肢があり、その中から選ぶというものが多く。例としては以下のようなものである（図3）。

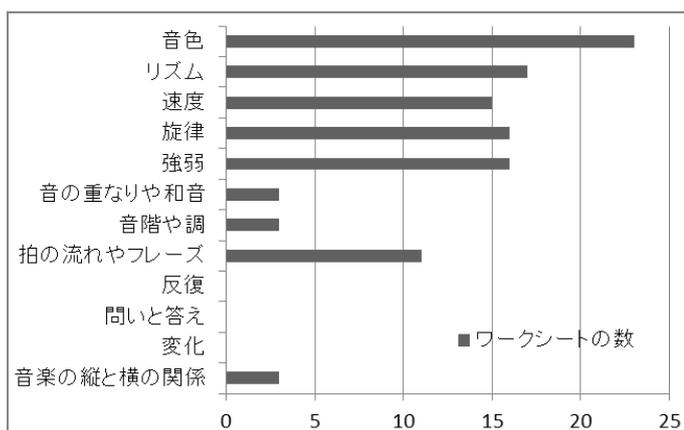


図2 音楽を形づくっている要素の学習に関連するワークシート数

それぞれの歌を聴いて、適した特徴を選ぼう。

「Pokemon」

この話は、戦いや挑戦に立ち向かいながら、彼らのポケモンを率いて子どものグループが冒険をするものである。

- | | | | | |
|---------------------------------|---------------------------------|----------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| <input type="checkbox"/> ゆったりした | <input type="checkbox"/> 速い | <input type="checkbox"/> 攻撃的な | <input type="checkbox"/> やさしい | <input type="checkbox"/> 強い |
| <input type="checkbox"/> かすかな | <input type="checkbox"/> リズミカルな | <input type="checkbox"/> 静寂 | <input type="checkbox"/> 乱暴な | <input type="checkbox"/> 興奮した |
| <input type="checkbox"/> 悲しみ | <input type="checkbox"/> 愉快的な | <input type="checkbox"/> ロマンチックな | <input type="checkbox"/> 思慮深い | <input type="checkbox"/> 楽しい |
| <input type="checkbox"/> 壮大な | <input type="checkbox"/> 辛辣な | <input type="checkbox"/> いたづらっぽい | | |

図3 イタリア小学校音楽教科書のワークシートの例 ※musica guida p.53より筆者訳出

上記のような選択肢は、2年生に上がると「優しく親しみやすい旋律」や「軽快で繊細なオーケストラの音色」というように、1つの単語ではなく、多少長くなっていく。

3年生では「音楽の判断基準」というタイトルで、ハーモニー、リズム、音色、旋律という要素とその意味を線でつなぐというワークシートが準備されている。3年生までにも、こうした要素についての学習は含まれていたが、このように定義を示したのはこれが初めてである。また、要素の定義を学んだ上で、ロックや軍隊行進曲など、音楽のジャンルごとに、判断基準となる音楽の要素を考えるというワークシートもあった。

拍の流れやフレーズについては、音符の足し算などをしながら拍子について学んだ後、実際の歌を用いて「拍を数えながら歌いましょう」というように、拍子を数えながら歌うというワークシートが準備されていた。

(2) 音楽にかかわる用語の学習

音楽にかかわる用語では、音符や休符、拍子記号についての学習が多くなっている（図4）。

音符や休符については、2年生で初めて学習している。主に4分音符、付点2分音符、2分音符、全音符の4種類の学習から入り、それに対応する休符とその長さについて表にまとめるようなワークシートとなっている。また、書かれた音符のリズム読みをする際には、実際に言葉を用いたリズム読みをすることになっている。用いられているのはイタリア語の単語であり、各単語の発音（アクセント）に留意したリズムが提示されている（図5）。

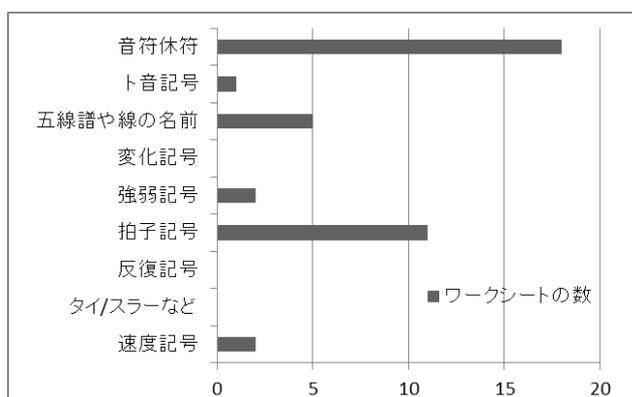


図4 音楽にかかわる用語の学習に関するワークシート数

4年生になると、8分音符も加わり、全音符の半分が2分音符、その半分が4分音符、さらにその半分が8分音符というように音価について教えている。さらに、それを図で表すだけではなく、「いくつの2分音符で全音符の長さになりますか」や「いくつの8分音符で全音符になりますか」というように文章でも問題が書かれている。



図5 単語を用いたリズム読みの例

五線譜や線の名前については、図で示して教えるだけではなく「五線譜は9つの線と8つのスペースがある」や「五線譜は5つの線と4つのスペースがある」というように、文章に対して○×で答える問題が用意されている。

強弱記号や速度記号については、楽譜が提示され、その楽譜から速度を表す記号には赤で○、強さを表す記号には青で○を付けるという活動が示されている。使われている記号は、速度記号では Allegro, Moderato, Andante cantabile などがあり、強弱記号では, *mf*, *f*, *mp*, *cresc.*, *decresc.* などがあった。

拍子記号については、扱っている拍子は4分の4拍子と4分の3拍子のみであった。楽譜を見て、4分の4拍子と4分の3拍子のどちらかを選ぶというものである。さらに2拍子系の拍子と3拍子系の拍子についても言及されており、2拍子系の音楽は「強-弱」、3拍子系の音楽は「強-弱-弱」というように強拍と弱拍についても教えている。

2 鑑賞の指導法

鑑賞に関するワークシートは全部で29枚であった。その中で、曲を聴いて「特徴やイメージを選択肢から選ぶ」ものは10枚、「特徴やイメージを自分の言葉で書く」ものは12枚、「感じたことを絵で書く」のは1枚、その他は8枚であった(2枚は重複)(図6)。

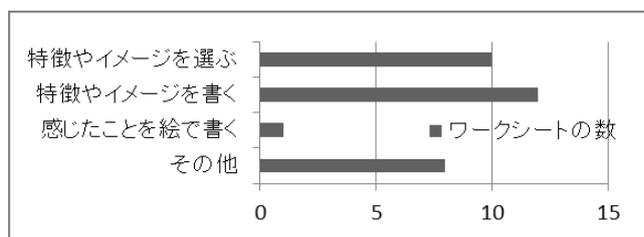


図6 鑑賞で感じたことを表す方法

鑑賞した曲について、特徴やイメージ、感じたことを選択肢から選ぶ活動は、特に低学年に多い。

1・2年生の鑑賞ワークシートは全13枚であり、その中で7枚が選択肢から選ぶ活動となっている。また前述した図3とそれについて述べたように、選択肢の内容は、学年が上がるごとに、単語から文章になっていく。3年生では、リズム・旋律・音色、ハーモニーという4つの音楽の要素を教えた後、シューベルトの「即興曲」とショパンの「練習曲」を鑑賞し、特に特徴的なのは旋律とリズムのどちらか、ということ問うているワークシートもあった。

鑑賞した曲について、特徴やイメージを自分の言葉で書くものは、鑑賞のワークシートの中でも一番多い活動となっている。1年生では、前述の選択肢から感じたことを選ぶ活動とともに「できれば他にも書き加えよう」というような形で、書く活動を導入している。選択肢があることにより、どのような内容を書けばよいのか、ということも理解することができる。2年生では、サン＝サーンス作曲の「動物の謝肉祭」の中の数曲を用いて、曲から動物を想像させ、その動物の特徴、そして音楽の特徴を書くというワークシートもあった。その後「ゾウは作曲者によって、軽く繊細な音で、また速い速度で作曲されている」などという文章に対し、○か×で答えるという活動が準備されている。また、鑑賞曲はいつも指定されているわけではなく、2年生のあるワークシートでは、児童に曲を探させ、その曲について特徴や鑑賞して自分が得られる感情についてをまとめるという活動が設定されている。

鑑賞した曲について、感じたことを絵で書くという活動を伴っているワークシートは、1年生での1枚のみであった。使われている曲はムソルグスキーの「展覧会の絵」から「卵の殻をつけた雛の踊り」と「ピドロ(牛車)」の2曲であり、各曲について感じたことを文章で書く活動と共に、曲を聴いて見えたものの絵を描く活動が指示されている。

その他の活動として「鑑賞したものを批評する観点を学ぶ」ものや「鑑賞の種類を学ぶ」もの、「曲の種類を選ぶ」もの、「音楽の効果を学ぶ」ものがある。

「鑑賞したものを批評する観点を学ぶ」ものでは、曲を聴いたときにどのような点に着目してイメージ

や感想を述べれば良いのか、ということを考える活動となっている(図7)。その他には「音楽は常に等しいものですか」という質問に対し「はい、決して変化しません」「いいえ、それぞれの音楽は異なる特徴をもち、さまざまな感情などを表現しています」というように、ある文章に対して2択から児童が選択する、というようなワークシートもある。さらに「音楽を聴いたときにはいつも同じ感情ですか」という問いに対し、「はい、なぜなら音楽は頭にのみ話しかけるものだからです」「いいえ、なぜなら音楽は心にも頭にも話しかけてくれるからです」というように、音楽が人の心に影響を与えるということ、音楽は頭と心で感じるものだとすることを学ぶ問いも見られる。

「鑑賞の種類を学ぶ」ものでは、鑑賞を積極的鑑賞(聴くための鑑賞)と消極的鑑賞(聴く目的以外での鑑賞)に分け、自分の日常を振り返り、音楽を聴いている各シーンでの鑑賞の種類について考えるワークシートが用意されている。また、表3のワークシートのように、各種類の音楽について聴く目的や聴く場所、聴くこと役割を考えるワークシートもある。このように「音楽を聴く」という行動にも、いくつかの段階があることを学んでいる。

「曲の種類を選ぶ」ものでは、時代を超えて普遍的に愛され続ける音楽を「芸術音楽」、ある一時代でのみ普及する音楽を「消耗音楽」として、楽曲を「芸術音楽」と「消耗音楽」に分ける活動を伴うワークシートが準備されている。5年生の最終段階では、ある2曲を聴き、どちらが消耗音楽なのかを選び、その理由を、音楽的特徴、歌詞の内容などから考えるという活動がある。

「音楽の効果を学ぶ」ものは、特に5年生のワークシートに集中している。内容の1つとしては、音楽とコマーシャルとの関係について学ぶものであり、まずはテレビコマーシャルから「宣伝している商品」

「商品の特徴」「使われている音楽の特徴」について調べることから始まる。そして調べてきたものに対し「これは買手の購買意欲を増進させていますか」「これは宣伝に成功していますか。またその方法とは何ですか」という問いに、音楽の特徴も踏まえながら口頭で答える形になっている。さらには、自分の宣伝したい商品について、広告デザインとスローガン、使用する音楽を探すという活動へ発展させる。また別の内容としては、児童たちで面白いストーリーを考え、そのサウンドトラックを選択肢(図8)から選ぶというものもある。この活動は、図8の①～⑪までの曲の特徴やイメージをしっかりと理解していないと選択できないものである。また、同様の学習は3年生のワークシートにも存在している。自分の周りにいる人を挙げ、その人の性格や特徴を書き出し、その人やその性格に合う曲を書くという活動である。ここで児童が選ぶ曲はこれまでに学んだ曲としているが、やはりこれまでに学んだ曲の特徴をしっかりと理解できていなければ、選択することはできないだろう。

V 総括

本稿では、小学校音楽科において、音楽に関する言葉を適切に用いて、感じ取ったことや考えたことなどを表すことができるような力の育成への課題に着目し、またその背景に認知的な学習の不足があると考え、イタリアの教科書におけるワークシートをもとに、認知的学習と言語活動の充実に向けた指導法につ

音楽を聴くときの注意するポイントについてチェックを入れましょう。

- | | |
|---------------------------------|------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 音楽の長さ | <input type="checkbox"/> 演奏者の美しさ |
| <input type="checkbox"/> 声や音の強さ | <input type="checkbox"/> 音楽の速さと雰囲気 |
| <input type="checkbox"/> 演奏者の魅力 | <input type="checkbox"/> 演奏の完成度 |

図7 イタリア小学校音楽科教科書のワークシートの例
※musica guida p.76より筆者訳出

表3 イタリア小学校音楽科教科書のワークシートの例

音楽の種類	聴く目的	場所	役割
クラシックの曲 オペラ	良い音楽を聴きたい という欲求	劇場 自宅	美的役割 音楽の喜びを味わう
ディスコ ミュージック			
サーカスの音楽			
ドラマのBGM			

※musica guida p.280より筆者訳出

- ①チャイコフスキー「白鳥の湖」
- ②モーツァルト「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」
- ③シューベルト「ピアノ三重奏曲 第1番 変ロ長調 2楽章」
- ④ショパン「12の練習曲 作品25より第1番 変イ長調」
- ⑤ストラヴィンスキー「春の祭典」より「乙女たちの踊り」
- ⑥ストラヴィンスキー「ペトルーシュカ」より「ロシアの踊り」
- ⑦ヘンデル「王宮の花火の音楽」より「歓喜」
- ⑧サン＝サーンス「動物の謝肉祭」より「白鳥」
- ⑨ムソルグスキー「展覧会の絵」より「小人」
- ⑩ムソルグスキー「展覧会の絵」より「鶏の足の上に建つ小屋」
- ⑪モーツァルト「クラリネット協奏曲 Ⅱ長調 2楽章」
- ⑫ムソルグスキー「展覧会の絵」より「古城」

図8 サウンドトラックの選択曲

※musica guida p.357より筆者訳出

いて探ることを目的とした。

日本の小学校学習指導要領では、楽曲の特徴や演奏のよさに気付いたり理解したりするために、楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すことを求めている。さらに、音楽を特徴づけている要素及び音楽の仕組み、音符、休符、記号や音楽にかかわる用語など〔共通事項〕として示されている内容について、鑑賞の活動に生かすことも示している。したがって、言語活動を充実させるためには〔共通事項〕が示しているような内容に気づくことのできるスキルを身に付け、それを利用して言語活動を行っていくという道筋を見ることができる。

イタリアの教科書は、これまでの研究により、音楽的活動を伴わない「音楽理論の学習」という学習活動が存在すること、また音楽の専門用語の概念を言葉や文章で教授する傾向にあることが明らかとなっている。したがって本稿では、多数存在するイタリアの音楽科教科書の中から、ワークシートを中心に展開している小学校音楽科教科書 *musica guida* に焦点を当て、そのワークシートを分析することにより、認知的学習と言語活動の指導法を概観した。

まず日本の学習指導要領における〔共通事項〕に照らし、音楽を形づくっている要素の学習と、音楽にかかわる用語の学習について、イタリアの教科書でのワークシートの指導法を調査した。

音楽を形づくっている要素の学習では、音の音色、強弱、音高、長短については、1年生で生活音を中心に学習することになっていた。まずは「高い」「低い」や「強い」「弱い」など、答える内容について選択肢が準備され、そこから選ぶだけの活動であるが、だんだんと自分自身で書く活動へ進んでいく。楽曲を聴いての選択肢については、前述のような「強い」「弱い」という単語から「この曲はまるでゾウが歩いているように強い音で表現されている」という文章に○×で答える、という問題に発展していた。つまり学年が上がるにつれ、感じたことを自分の言葉で表現できるよう、選択肢がある問題でも、文章で答えるための準備がなされていた。また、選択肢の内容も「辛辣な」「興奮した」「かすかな」というように、よりたくさん形容詞が準備されており、「おもしろい」「きれい」のように画一的な言葉ばかりでなく、音楽を聴いたときに用いることのできる語彙を増やす役割を担っている。その他、ハーモニーやリズム、旋律などという言葉とその定義を線でつなぐ活動があったが、言葉や定義を学んだあとは、実際に音楽を聴いてその音楽の主たる特徴は何か、というような活動が準備されているなど、活用力も同時に身につかせている。

音楽にかかわる用語の学習では、音符の音価についての学習に特徴が見られた。「いくつかの8分音符で全音符の長さになりますか」など、音価の問題でも文章での出題となっており、各音符の音価の概念について、数的な思考力だけでなく、説明的な思考力をも鍛えている。その他、五線譜の学習においても、正しい五線譜と間違った五線譜を、図で示して正しいのはどちらか選ぶのではなく、「5本の線と4つのスペース」「9本の線と8つのスペース」のように文章で示して正しいものを選択するというように、やはり文章による理解を深めている。

また、学習指導要領の音楽科における言語活動についての内容に照らし、イタリアの小学校音楽科教科書を概観したところ、楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを表現するために、まずは選択肢を準備するという特徴があった。選択肢があることにより、次に自分の言葉で表す際にも、どのような言葉を用いればよいのか、どのように自分の思いを表現すればよいのか、何に着目すればよいのか、ということに気づくことができるのではないだろうか。また、鑑賞の指導法には他に、楽曲を芸術音楽と消費音楽に分類したり、音楽とコマーシャルの関係について考えたりするものがあつた。これは音楽の特徴やその曲のイメージなどの理解が深まっているからこそ実現可能な内容であり、感じたことやイメージを伝えるという活動から進展している。

以上のことから、本教科書の特徴として3点が明らかとなった。

1 点目は、イタリアの教科書では、認知的学習の段階から、説明的な言葉や文章を用いた指導法が用いられているということである。音価の概念1つをとっても、日本においてはできるだけわかりやすく、という思いで図を多用する傾向にある。しかし、本教科書では、自分の言葉で説明をすることを想定した、文章による出題や説明が多く見られた。

2 点目は、イタリアの教科書では、鑑賞活動の基本ともいえる、鑑賞のポイントや鑑賞の種類を学んでいるということである。たとえば、音楽を聴くときのポイントを問う課題では、演奏者の美しさや演奏者

の魅力が大切なのではなく、その音楽の雰囲気や演奏そのものに着目すべきなのだとすることを学んでいる。さらに、積極的鑑賞と消極的鑑賞を問う課題では、音楽は聴こうと思って聴くときと、その他の目的のときでは、音楽の役割が変わってくるのだということを知り、授業では積極的鑑賞を行うべきだということ学んでいる。

3点目は、鑑賞後の活動がイメージや感じたことを述べる活動からさらに発展していくということである。特に音楽とコマーシャルとの関連については、生活と音楽とがいかに関係しているかということを知り、では音楽は生活の中でどのように使用され、どのような役割で用いられているのか、ということを考えるきっかけになっている。この活動は、楽曲の特徴を捉えることができているからこそできる活動である。つまり、楽曲の特徴を考えたり、述べたりする活動がその他のことに役立っているという実感を得ることもでき、そのこと自体に楽しみや喜びの感情を抱けるのである。日本では「特定の課題に関する調査（音楽）」によると、児童に対する質問紙調査において「音楽の学習は将来、社会に出て役立つと思いますか」という問いに肯定的に回答したのはたったの59.3%であり、約4割の児童は音楽の学習は将来役に立たないと感じている。音楽の授業を授業で終わらせることなく、実際の生活に結びつけていくことこそ、これからは必要なことの1つであると考えられる。

以上のことから、日本での問題とそれに対する示唆についてまとめる。

まず問題の1つ目に、日本において児童が音楽の特徴や演奏のよさを言葉で表すのがあまり好きでないのは、認知的な学習が不足していることが挙げられる。これについては、指導法の工夫という点から、図や絵を使っての説明に終始せず、文章などを用いた説明的な指導も併せて重要である。

問題の2つ目に、音楽の特徴や演奏のよさを感じたり言葉で表したりする必要性を児童自身が感じられていないことが考えられる。これについては、音楽が私たちの生活にいかに関係しているか、音楽が私たちの生活や感情にいかに関係を与えているかということを知ることが知らなければならない。それを理解したとき、児童は音楽の特徴や演奏のよさを考える活動に興味をもち、またそれをプレゼンテーションするという活動につながっていくのではないだろうか。

注

- 1) 大野内 (2012) は、イタリアの音楽科教科書の内容を学習活動別に分類したところ、歌唱、器楽、鑑賞、創作といった活動のほか、音楽理論の学習があることを示している。
- 2) イタリアでは小学校は5年間である。

引用・参考文献・Web 資料

- ・ Cancedda, Silvia (2008) *Musica guida*, Nicola Milano Editore
- ・ 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2010) 「特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）」 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_ongaku/point_001.pdf
- ・ 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』
- ・ 大野内愛 (2012) 「現代イタリアの中学校音楽科教科書の特徴—2007 年以降の音楽科教科書に着目して—」『音楽学習研究』第7巻、音楽学習学会、pp.21-27